



読書歌壇

米の値のいかにあらうと代田播く
神戸市 吉野 勝子
花は葉に正門だけの母校かな
松山市 中矢 尚
山ありて海豊かなり初夏の風
村上市 鈴木 正芳
銭湯のなき町となり若葉風
横浜市 鈴木 基之
脱穀のベルト8の字麦の秋
横須賀市 大塚遊球子

小池 光選

はじめての我が投稿歌を添削のうへ採りくれし
岡野先生 東京都 土井紘二郎
【評】このたび長く読書歌壇の選者をつとめられた岡野弘彦さんが百一歳の高齢で亡くなった。偲ぶ歌がいくつも寄せられた。一首一首に丁寧な添削を施されていたと聞く。夫の涙拭きたるテッシュペーパーを握りしめつつ病室を出づ
厚木市 斎藤喜代美

【評】重い患いで入院している夫だろう。思わず涙を見せた。それを拭いたテッシュペーパーを握りしめて病室を出る。万感迫る思いを事実の提示だけにとどめて詠っている。高一の名前の順が席の順それが始まり生涯の友
坂東市 富山久美子
【評】学校の出席番号はたいがいアイウエオ順。偶然、隣りになった一人が生涯のまたとない友人になった。幸運と言つべきだろう。我が歌の初めて載りし喜びを岡野先生より授かりき
宇都宮市 阿久津登美江
岡野先生に選ばれし朝の感激を今も忘れじ今も詠みおり
福山市 金尾 洵子
筋を取るスナップエンドウの青臭き匂ひに春の喜び溢る
高崎市 野口 啓子
をさな子はしずかなままでじつとして地面にうごく蟻をみてをり
仙台市 三角 清造
ある夜のテレビに見れば祖母役になつてをりたり松坂慶子
匝瑳市 椎名 昭雄
古稀の腰いたた言いて立ちあがる同窓会の記念撮影
京田辺市 長谷川准子
朝な朝な肥後守にて鉛筆を削りてくれし父の浮かび来
東京都 影山 博

音響くただただ燃ゆる春の山
岩手県 佐々木松男
酷暑日てふ新名称を決めて待つ
土浦市 今泉 準一
猛禽も春愁じつと雨の中
越谷市 安居院半樹
戦禍のたび知る地図の地理春深し
岡山市 上塚 香
子規の選受けてもみたき虚子忌かな
東海市 斉藤 浩美

栗木 京子選

花の名に疎き我にも春は来てスマホに問うてそれでよしとす
浜松市 秋原 容子
【評】スマホで花の写真を撮って検索すると名前が表示される。名を知ると花への愛情が深まるが、すぐに忘れて再検索することも多い。結句のゆったりした心情が心地よい。海裂けて歩いて渡る船員を出ホルムズと人は言うなり
川崎市 辻 敏明

【評】ホルムズ海峡が封鎖され、足止めされた船舶の乗組員に苦難の日々が続く。旧約聖書の出エジプト記のような奇跡を、と願う作者。「出ホルムズ」を皆が待っている。富士山に五十二年をたなびかせ女子寮の記憶持ちよる五人
箕面市 高島 陽子
【評】女子寮の仲間だった五人。五十二年振りに集合したのか。または五十二歳の記念登山だろうか。「たなびかせ」が晴れやか。雨にけぐる天王山よ百一歳岡野先生旅立ちにけり
枚方市 鍵山奈美江
岡野先生に選ばれし一首直されてあり一文字の助詞を
真岡市 馬場 弘幸
不登校の孫に伝えることひとつ小さな窓を少し開けなよ
伊丹市 寺地 邦子
テレワークひとり暮らしの狭い部屋言葉つないそよになる日暮れ
東京都 佐藤 勝美
一瞬でオープンカーは走り去り都心の道に黄砂舞いあがる
川崎市 三田 淑子
巢から落ち産毛のままの雀子を冷やさめやうに編でくるみぬ
東京都 関 美奈子
鹿の調査に山頂目差す青年に熊がいるよと話しかけやる
福知山市 阪梨 義春

ほろり泣く朔太郎忌のマンダリン
大津市 星野 暁
玉の井に迷いこむなり荷風の忌
川越市 小畔川 霞
詰むといふ若者言葉春終る
東京都 森 一平
井の頭から神田川へと春の水
東京都 橋本 幸司
生命線友と見せ合う春の昼
行田市 吉田 春代

俵 万智選

方言につられて話す方言を連弾のように聴く同窓会
横浜市 紺屋 小町
【評】ご無沙汰している方言も、古い友人に会うと徐々に復活する。それにまたつられて別の人からも方言が……その連鎖と響き合いを楽し気に聴く気分。連弾の比喩がみごとたふと消えてふと現れる喫煙者ヒーロー変身するほどの間に
栃木県 小田部 秀

【評】最近では決められた喫煙所で吸うのがマナー。すっと席をはずし、一服してきたのだろう。なにかと肩身の狭い喫煙者の、板についた行動を、前向きに捉えているところが魅力。君といふ光る水面を撫でただけあの日の吾は水切りの石
青梅市 諸井 未男
【評】もっと深く、ドボンと沈むほどの関りを持ちたかったのに。水面は美しい比喩でありつつ、二人の前にあつた実景のように浮かぶ行き先を夏に定めた雑草がガードレールを乗り越えて来る
燕市 田巻由美子
サボりたい気持ちかたどって身体を一軒の空き家にする
大野城市 亀田 巧
約束の束という字の中にあるリボンを結び直して君
高島市 宮園佳代美
正解を求めることに慣れた子が人生にまで正解を探す
久留米市 春日 登
連休に会ったおかげで次に会う予定も決まる愉快な弾み
堺市 一條 智美
いつまでもマジすさまじくむつまじくあるまじきほどイチャイチャであれさいたま市山口晋裕
「進」とふ動詞の名前の君からの葉書に今日も旅の消印
鴨川市 春木 敦子

強く生き優しく老いて春田打つ
行田市 永沼規美雄
途中から来てよく喋る溝邊へ
松原市 たりずむ
鳥雲に校歌の山の高からず
東京都 天地わたる
海夕焼人類滅ぶことなかれ
松江市 三方 元
積ん読を越えて蠅虎はゆく
朝倉市 深町 明

黒瀬 珂瀾選

岡野氏の世を去りてなほ羅へり添削つけし文語の調べ
足利市 熊田 敏夫
【評】先の4月24日、前読書歌壇選者の岡野弘彦さんが亡くなりました。本欄には岡野さんの薫陶を受けた人も多かろう。歌人は世を去ったが、その文語精神は永く伝わるだろう。尾根つたひ父の建てたる鉄塔や浅間は遠く思ひ出近し
鶴ヶ島市 由井 意男

【評】浅間山に建つ送電鉄塔を手掛けた父。子どもとしても、鉄塔が並ぶ風景は誇らしいだろう。その山は遠くにあつても、父親の思い出はつねに胸にあるのです。スイーツを笑顔で受け取る部下われら半額シールに気づいていても
長門市 松岡 加恵
【評】上司の差し入れは値引き品。でも、心遣いそのものがあるがたい。半額シールのことには触れないのが、大人の対応です。袴姿の岡野先生頭ちにけり計報の記事を切抜きしつつ
宇都宮市 福田 滋子
四代の御世生きて逝きし先生を葉ざくらの下に偲びてをりぬ
さいたま市 小平 英治
短歌詠むを詠むへと我を推しけれ岡野先生身罷りたまふ
埼玉県 酒井 忠正
先生のみ魂は今や新緑のふるさとの山に鎮まり居まさむ
鳥取県 川上 寛史
父母は小さき骨壺に並び雪の納骨堂はけんかも出来ず
佐世保市 近藤 福代
黒塗りの公文書のごと野焼させし田が並びをり山のみもとに
鹿嶋市 加津牟根夫
絵手紙で卒寿の友が告げてくる庭の手入れができないことを
千葉市 佐藤 綾子



題字デザイン・イラスト 福田美蘭

◇投稿規定◇ はがき1枚に未発表の1作品。住所、氏名(ふりがな)、電話番号を明記。◇他の媒体、選者への二重投稿は厳禁です。選者が添削することもあります。〒103・8601、にほんばし蔵前郵便局留、読書歌壇、〇〇先生(希望選者名)係または読書新聞オンラインから ◇毎週月曜日に掲載 右の影絵はころもがえ

(本阿弥書店、30080円)